

## 超克

第16期生 北澤 涼平

「この人生を簡単に、そして安楽に過ごしていきたいというのか。だったら、常に群れてやまない人々の中に混じるがいい。そして、いつも群衆と一緒につるんで、ついには自分というものを忘れ去って生きていくがいい。」

ドイツの哲学者、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェの遺稿を、妹のエリーザベトが編纂した著書『力への意志』にこんな一節がある。彼は、逆説的に、個々人が自分自身の意見・主張を持つ事、換言すれば、個々人が自分自身の主人たる事の重要性を強調した。他人の意見・主張に流され、自分を委ね、迎合する事は、ニーチェにとって、悪であり、人間としての本来あるべき姿から疎外されている様子であったのだ。

さて、彼の死から120年。現代において、自分自身の主人たる者が一体どれほど存在していようか。高度な自然科学の発展は、人間疎外をさらに助長した。人間は、周りの他人だけでなく、人間ですらない機械にまで、自分を委ね、迎合するようになった。それが最適解であると盲信し、自分で批判する事をしなくなった。自分で考える事をしなくなった。人間は、どんどん、人間でなくなった。

小野ゼミに入る前の、一般的な大学生であった私にも、この人間疎外の波は、押し寄せていた。「他人がそう言っているから」という言葉が、何か行動を起こす前の私の心を支配していた。成人して、これまでの自分の人生を振り返った時に、自分を変えたいと思った。そして小野ゼミに入会した。

16期全員で、ゼミの活動方針を決める会議において、全会一致で、活動方針が決まりかけた時に、鈴ちゃんが「いや、私は、これじゃ駄目だと思う。」と涙を流して訴えたことがあった。ある後輩を入会させるかどうか決定する会議において、全会一致で、不採用が決まりかけた時に、遥絵ちゃんが「私は、どうしても入れたい。」と涙を流して訴えたことがあった。他にも、ディベートや論文の議論の際に、同期から、「いや、俺／私は、こう思う。」という言葉が多く耳にした。素晴らしいと思った。私も、素晴らしい先輩・同期に負けまいと、自分自身の意見・主張を持つようになった。就職活動が終わり、内定を獲得した後、自分自身で考え、憧れの大学院生の方々のようになりたいと思い、企業に就職しないという選択をとった。実は、その際、両親に猛反対された。それでも、自分自身の意見・主張を貫き、最終的に納得してもらい、応援してもらえるようになった。小野ゼミ入会以前の私であったら、きっと両親を説得するなんて事は、できなかったであろう。この選択が正しいものかどうかは、分からない。しかし、私は、自分自身の主人たる私を誇りに思っている。

追記：ノリでドチャクソ堅い文章を書いたので、ゆるい文章を書くパートを作りました。同期の皆、今までありがとう！皆のことを本当に尊敬しているよ。たまにゼミに遊びに来てね。岩ちゃんと待ってるよ！